

長年、日独の懸け橋となってきた無名の女性がいた。ルジチカ多喜枝さん(享年66)。涙もろくて、世話焼きで、口癖は「だって放っておけないじゃない」。その訃報に触れたゆかりの人たちが思い出を綴った雑誌が今春発刊された。編集を担ったのは横浜市内のドイツビールバー店主、丸山富仁さん(46)。「何かに迷ったとき読んでもらいたい。きっと力になるはず」。自身の歩みに重ねるように、そう話す。

(田崎 基)

「会うたびに魂のレベルが一つ高まる感じ。今の店があるのも多喜枝さんのおかげかもしれない」。横浜市神奈川区でドイツビールバー「プーシエル」を経営する丸山さんは言う。「無名だけど、すごい人だった。形にして残したい」と冊子の責任編集を買って出た。

多喜枝さんは1946年に岡山で生まれ、短大卒業後に



ドイツの自宅で手料理を振る舞う多喜枝さん(1998年撮影、丸山さん提供)

## 日独の懸け橋 故ルジチカ多喜枝さん

### 思い出綴る雑誌発刊

# 迷ったとき力に

渡独。無給で家事手伝いをするなど貧しい生活が続いたが、やがて日本企業が見本市を開催する際に通訳を担当したり、旅行会社のガイドやコピーライター役になったりと、日独交流に尽力した。3度目のがんで亡くなったのは2012年秋。波乱の人

生と人となりをしるのばせる逸話が誌面を満たす。

丸山さんとの出会いは10年ほど前。知人が世話になって

いたのがきっかけで、以来、料理研究を兼ねドイツを旅するたび、本場の料理や文化を教えてもらった。「うちに泊まればいいと招かれ、妻と行ってみたら、数人の中年女性

グルーブがいて。見知らぬ人とリビングの床で雑魚寝ですむ。

「駅で野宿していたバックパッカー、料理人を目指し修業中の若者」。自宅に招き入れては朝食を作り、弁当まで持たせる。悩みに耳を傾け、「大丈夫よ!」「もう少しなんだ

から頑張りなさい」と背中を押し。なぜそこまで尽くすのか。そう尋ねると「人が喜んでくれることが生きがい。それが幸せなの」と答えたという。丸山さんは「味わった苦労と貧しさがそうさせていたんじゃないか」と考える。

一方で相通じるものも感じ



多喜枝さんとの思い出が綴られた冊子を持つ丸山富仁さん(右)と妻あゆみさん—横浜市神奈川区の「プーシエル」

てきた。自身の店は本場の味にこだわり、迷いが生じることもあったが、常連客の「おいしかったよ」の一声を励みにしてきた。寄稿したのは41人を数えた。丸山さんは「あらためてその尽くす人生を知った。見習いようもないが、迷ったとき、多喜枝さんならどうするかと思えば、力になる」と話す。

不定期刊の雑誌「アートタイムズ」11号「タキエさんがいた!」(B5判96頁、800円)の問い合わせは、プーシエル ☎045(642)4010。